



何もないがすべてある②



写真／エレナ 文／関 孝弘

家族揃って高柳の山里に住む友人宅を訪れるようになって、十三年がたつ。イタリア人の妻と二人の子供たちは、この地を訪れるの

が何よりの楽しみである。数年前からは、イタリアからやって来る義母を伴ってお邪魔するのが我が家の欠かすことのできない春の恒例となり、今年

もまだ残雪が所々に残るゴールデンウィークにお邪魔した。

自然の恵み豊かな春の山菜を囲み、久しぶりの再会を祝し乾杯。コゴミ、ウド、山ワサビ、イタドリ、オオバ



キスミレ、カンゾウ……と並ぶ山菜づくしの食卓は、料理人によって美味しく調理され美しい食器に盛りだくさんの料理より、心に染み入

る贅沢ではないだろうか。自分たちが山に入り採ってきた新鮮な山菜をその夜食べる感激は、また格別である。

数年前、都会でも味わいたくて、採った山菜を東京の我が家の庭にだいに植えてみたけれど、なぜか味が全く違う。友人は「それは雪の力なんですよ」と言う。人間の力ではどうすることも出来ない大自然の力の凝縮であり、雪だけではなく、土も、空気が全て違うのである。都会では絶対に味わえない新鮮な山菜は、この時期だけの何よりのご馳走であり、自然から人間への大きな恵みである。そして、その食卓から人間の輪が広がる大きな喜びは、恵みの連鎖であろう。

ここ高柳の山里には、都会の便利さは何も無いけれど、人間にとつて大事なものが全てある、といつも心の奥底に感じる。村には年老いたお婆さんがやっているお店が一軒だけあって、私たちは必ず美味しいお醤油を買いに行く。東京から少しのお菓子を持って「こんにちは！また来ました」と訪ねる

在日25年のイタリア人マリアンジェラ・ラーゴと日本人ピアニスト関孝弘が夫妻でつづる、誰でも幸せになれるイタリアの発想術の本。
イタリア駐日大使推薦



ブリッランテも日々

Viva la Vital

二〇一五年三月二〇日刊
ブリッランテな日々 晶文社刊より

と「こんな田舎までいつも来てくれて、ありがとうございますね。いつまでいらっしゃるのですか？……ちよつと待って下さいね……」と、いつも大根や素麺を奥から持ってきてお返しに下さる。何かほんのりとした安堵感。アッタカイナと心に染み入る瞬間。

私の娘は今年で成人式を迎えたけれど、車から降りると同時に「いるいる！ザリガニたくさんいる！」と童心に帰ってしまう。私も楽しくなって年も忘れて、娘と一緒に棒に糸をつけて煮干しを餌にザリガニ取りを始める。そこに「美味しそうだね。天ぷらにして食べよ

うぜ！」と友人は娘の目を覗きながら悪戯つばく茶化す。そんな他愛のない会話の中にも、人の琴線に触れる何かが感じられるのは不思議である。村全体が、都会からやって来る私たち家族を優しく温かく包んでくれる。

今、世界では超狩猟的な生活の支配が強まり、それぞれが目標のために役割分担し、組織をより有効に動かすためにリーダーが生まれ、人間の有能無能が問われるようになった。毎日が勝負の連続で、当然勝つことが美德とされる。多くの人は、そんな狩猟的な世界で生きていくのだとは思うけれど、ここ新潟の山奥に來ると「仕事が出来、出来ない」というような世知辛い人間の評価基準など存在せず、ささやかな楽しい毎日を美德とする世界が存在している。もちろん、この対比的な二つの世界には、それぞれに幸せの形があるのだから優秀はつけられないけれど、ノンビリとした穏やかな世界を受け入れ楽しめる心の余裕を持っている自分がとても嬉しく思う。「大切なことって何？」と考える時間

の余裕は必要である。

日本には、素晴らしい「間」の文化があって、心の余裕を大事にしてきたと思うのに、今の日本は、それとは反対の方向へ猛スピードで進んでいるような気がしてならない。仕事をすると、勉強する人、多くの日本人が時間に追われて死に物狂い。この忙しさは一体どこから来るのだろうか。何の目標があつてそんなリズムで動いているのであるが、そんな速さでは得るものより、失うものの方が多いのではないか？

世の中が便利となり、生活も豊かに楽になったとは思うけれど、今一度、日本の美德でもある「無」の心で、自分自身を見直すことも大事ではないだろうか。無になるということとは、無いものの存在を改めて見直すことなのだと思う。無の世界では、心は静寂で、余分な虚飾から解放され、原点を見直すことになる。自分と対峙すれば、自己を見つめ直す時間となる。無とは何も無いということではなくて、新しい世界への架け橋を作るための「空間」なのである。

大切なことに気づく場所は、パソコンの前ではなく、いつも青空の下である。友が住む過疎の山里には何も無いけれど、全てがあるような気がする。リフレッシュでもなく、充電でもなく、ただニューラルな時間が過ぎていく。毎日が最高の時間。自然のリズムに身体を任せきつた時、いつも心の中から全身に広がっていく、この「透明な感情」は何なのであろう？この感情の中に、生きるための大事なことがあるように思う。

人間は本質的には皆同じ。私の家族の半分はイタリアだけれど、西洋と東洋の境界線なんて無いと思う。生きるのに不可欠な最も大事なものに對する深い想いを突き詰めてたどり着いた「心の奥の方にあるアツタカイモノ」で多くの人と繋がりたい。人間の心の中に棲んでいるアツタカイモノだけは、今も昔も、西洋も東洋も、本質的には変わらないと思うから、そんな意味からも、高柳の山里は、私たち家族にとって何よりも大事な心のスペースとなつているのである。

(横浜市)

